

北一輝と法華思想(一)

―その著作にみる『法華経』と日蓮の影響について―

若 林 孝 彦

- 一 はじめに
- 二 学生時代
- 三 『國體論及び純正社會主義』……………以上本号
- 四 『支那革命外史』……………以下次号
- 五 『日本改造法案大綱』……………以下次号
- 六 『靈告日記』……………以下次々号
- 七 総括

一 はじめに

1 北一輝について

北一輝(一八八三―一九三七)は、一般的には「国家主義運動の思想的指導者」(『現代日本 朝日人物事典』朝日新聞社)、「国家主義運動の理論的指導者」(『日本歴史大事典』小学館)、「大正・昭和前期の『国家』主義思想家」(『日本史大事典』平凡社)、「国家主義者」(『岩波 日本史事典』岩波書店)、「国家主義思想家」(『国史大事典』吉川弘文館)とされるように、日本政治史、日本思想史のうえで「国家主義者」として取扱われる歴史上の人物であ

り、各事典の解説文末尾は「二・二六事件に際しては直接関与しなかったが、黒幕と考えられ、西田税とともに軍法会議で死刑判決を受け、刑死」（前記『岩波』）といった主旨の文章で総括されるのが常である。

政治学者の山口定は、著書『ファシズム』において、日本の代表的ファシストとして北をあげ（以下、巻末の参考文献からの引用の場合は、著者名と頁数を本文中に以下の形で示し、二種以上の場合には刊行年で区別する。山口、九九、一五八、一六一頁）、「ファシズムの時代」が始まる一九一九年に発生した歴史事象として、ムツソリーニ（一八八三—一九四五）による「参戦兵士のファッシ」の結成、ヒトラー（一八八九—一九四五）によるナチスの前身である「ドイツ労働者党」の結成、と並んで北の『国家改造案原理大綱』（のちの『日本改造法案大綱』）の脱稿が掲げられている（山口、二二三頁）。北が本場に「偉大な国家指導者」であったヒトラーやムツソリーニに比肩すべきファシストかどうかは大いに疑問が残るところであるが、日本における北の評価がこのようなものである、ということとは明らかであろう。

一方で、北が熱心な『法華経』と日蓮の信奉者であったことも、広く知られている事実である。

仏教学者の田村芳朗は、著書『法華経』の中で、近代の日蓮主義者として、田中智学（一八六一—一九三九）、高山樗牛（一八七一—一九〇二）、井上日召（一八八六一—一九六七）、石原莞爾（一八八九—一九四九）、宮沢賢治（一八九八—一九三三）、尾崎秀実（一九〇一—一九四四）と並んで北を大きくとりあげ、「右翼革命と日蓮主義を結びつけた代表者として、二・二六事件の黒幕となった」とする一方で、「一輝の主張する純正社会主義とは『国家社会主義』の型に属するものであ」るが、「俗にいう国家主義とは発想法を異にするものである。根底は民主的な社会主義にあることはかれ自身いつている。」と微妙な表現ではあるが、一定の評価をしているようにみえる（田村、一五五—一六三頁）。

また、仏教学者の末木文美士も、田中、井上、石原とともに、北は日蓮主義者だとしている（末木、二二一頁）。最近の研究者も、北を「日蓮主義第二世代」（大谷、二〇一二、二二五頁）と捉えたり、「一九三〇年代（昭和一〇年前後）の日蓮主義の急進化を、北一輝に焦点を絞り」描いたりしている（津城寛文「国家改造と急進日蓮主義―北一輝を焦点に」西山編、二二二―二二九頁）。

しかし、常識的に考えると、ファシスト、超国家主義者というイメージと、熱心な『法華経』の信者のイメージは結びつきにくいし、解りにくい。私は、従来の学問的な傾向として、歴史学、政治学の立場から北を論ずる場合には、北の法華思想と政治思想の関係についてはあいまいにされるのが常であり、¹⁾ 仏教学の立場からは、北については語ることをさへ憚られる雰囲気があつたのではないかと考えている。

現在における北に関する最高レベルの著作・研究と考えられる松本健一『評伝 北一輝（全五巻）』においても、北の法華思想と政治思想の関係について独立して論じた箇所はなく、北の行動の事実として『法華経』の読経や経巻の献上が述べられるとともに、北の著作に引用された『法華経』の文言を若干指摘するにとどまっている。

また、従来、仏教学者の著作では、前述の田村芳朗『法華経』のように北について詳述するのはまれであり、真理を説く平和な宗教であるべき仏教に、二・二六事件で処刑された北のような夾雑物を交えて論ずることはタブー視されたのではないかと考えられる。

松本が述べるように、一九七〇年代には「北一輝が右翼であるなら、その研究者も当然のことのように右翼（評伝1、xviii）」とされていたのである。

2 問題の所在

私は、本稿を通じて、北の思想に『法華経』や日蓮の思想がどのような影響を与えたか、あるいは与えなかった

のか、を明らかにしたいと考えている。

そもそも、「北一輝は『法華経』の熱烈な信者である」とか「日蓮主義者である」と強調されるとき、その意味するところは、北の宗旨は日蓮宗である、というような単純で私的な信仰事情を述べているのではないはずである。国家主義者あるいは革命思想家としての北が、その思想や行動に『法華経』や日蓮の何らかの影響を受けているというときに、初めてそのようなことがいえるのではないだろうか。

従来北一輝研究は、政治思想の側からであれ、仏教の側からであれ、彼の異常なまでの『法華経』信仰に圧倒されて、それが彼の思想や行動に影響を与えないはずはないと考え、十分な実証をおろそかにしたまま、北は『法華経』の熱烈な信者である、日蓮主義者である、としてきたのではないだろうか。

3 研究方法

北は、基本的には日本政治史、日本思想史のうえで語られる人物であるが、政治家ではない彼は、佐渡在住の若年時を除けば、ほとんど演説はしたことがなかったとされている。²⁾したがって、北の思想を考える時、その著作に表れているものが、彼の思想のすべてであると考えられる。北の著作は、書簡や二・二六事件の調書などを含めて『北一輝著作集(全三巻)』及び『北一輝 霊告日記』に網羅されている。したがって、本論では、この四冊を熟読、精査して、そこに記載された『法華経』や日蓮、さらに広く仏教、宗教に関係する文言、思想、行動を拾い出し、それが具体的にどのようなように彼の思想に結びついたか(あるいは、結びつかなかったか)を明らかにしていきたい。その際、『法華経』からの経文の引用については、その出典と原文(漢文)及び読み下し文を明らかにし、その引用の意図や趣旨を、できるだけ明確にするようにした。

また、時代背景や北の政治思想については、必要な範囲で触れることとし、北の関係者の著作や、研究者の著作

も参考にして論じたい。

この場合、北の四冊の著作を基準にして、以下の五期に区分して考察することが、彼の思想的な推移を考えるのに都合がよいと考えられる。

- ① 学生時代（一八八三年四月三日の誕生から一九〇五年末再度上京するまで）
- ② 『國體論及び純正社會主義』（以下『國體論』と略記）の執筆、出版（一九〇六年）以降
- ③ 『支那革命外史』（以下『外史』と略記）（前半部分）執筆、配布（一九一五年末）以降
- ④ 『國家改造案原理大綱』（以下『原理』と略記）（のちに『日本改造法案大綱』（以下『法案』と略記）と改題）執筆（一九一九年八月）以降

⑤ 『靈告日記』（以下『靈告』と略記）の始まる一九二九年四月二七日以降、二・二六事件により処刑される一九三七年八月一九日まで

4 先行研究・研究動向

前述のとおり、戦後は、北一輝を論ずるだけで「右翼」のレッテルを貼られた時代が長く続いた。北の政治思想についての研究も、当初は、北は戦前の日本を戦争へ導いた誤った思想の持主である「ファシスト」、「超国家主義者」との前提にたつたものが多かったと考えられる^③。

松本健一は、「政治学者たちによる思想上の検討も、大きくいえば、戦前のマルクス主義史観、および戦後日本の知識人を支配した「社会主義への移行」説に立脚したものであり、「共産主義＝革命を正統と考え、政治思想的には国家社会主義＝革命的な北一輝をファシスト＝疑似革命と捉える図式」としている。（松本一九九六、七頁）

しかし、一九九一年一二月のソヴィエト連邦崩壊に起因する東西冷戦の終結をきっかけとして、このような状況

は大きく変わっていったと思われる。特筆すべきは、二〇〇四年に刊行された松本健一『評伝 北一輝（全五巻）』であろう。松本は、一九七〇年以降、北に関する論考を数多く著してきたが、その集大成が同書である。版元が岩波書店であることも含めて、同書によって、北一輝研究は真に市民権を得たといえるのではないだろうか。

一方、仏教学の側においても、以前は、田村のような勇氣ある著作は珍しかったが、最近では、以下のように、仏教学者、宗教学者による本格的な論考が目立つようになってきた。

松岡幹夫「北一輝における信仰と社会思想の交渉」（松岡、所収）、津城寛文「国家改造と急進日蓮主義―北一輝を焦点に」（西山編、所収）がその代表的なものである。

松岡は、前記論文において、次のように述べている。

（北一輝の：筆者補）ナシヨナリズムに宗教的なものがいかに関わり、さらにその中で日蓮仏教がいかなる役割を果たしたのか、という問題を改めて本格的に考察してみたいと思う。研究史を回顧すると、北一輝と法華経思想あるいは日蓮思想との関係については早くから様々に論じられてきた。しかしそれらの多くは、中濃教篤によれば「結果的には筆を投げるか、疑問として残すにとどめられている（原注、中濃、九二頁）」というのが実情であった。この中濃の言は一九八〇年代前半になされたが、基本的状況は今日でも変わっていない。（…中略…）北の革命思想と宗教というテーマに取り組んだ研究は、まだ見当たらない。（松岡、五六―五七頁）

また、津城は、前記論文において、次のように述べている。

(北一輝は：筆者補) 政治と宗教の関係に「謎」が残る人物である。また、その「宗教」は、西山茂氏によって「霊的日蓮主義」と表現されるように、「社会」的側面だけではなく、「他界」的要素に光を当てねば理解できない部分がある。(西山編、一一三頁)

さらに、近年では、広く近代日本と日蓮主義といった視点からの著作も目立つ。

前記二書に掲載された他の論考以外にも、大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』、大谷栄一『近代仏教という視座』などが参考になる。

また、学術書ではないが、藤巻一保『魔王と呼ばれた男 北一輝』は、「従来の北一輝論に欠けている(と私が考えてきた)北の信仰に関する部分について」(藤巻、三二七)の著作であり、参考になる。

以下では、まず北の誕生から学生時代にかけての履歴を確認しつつ、仏教、宗教との関係について論じる。

二 学生時代

本章では、北一輝の家系、彼の誕生から一八九七年の佐渡中学入学を経て、一九〇〇年の同中学退学、一九〇四年夏の初上京と早稲田大学での聴講、一九〇五年末の再上京までの時代を考察する。

1 誕生

北一輝(本名は輝次、後に輝次郎に改名)は、一八八三年四月三日、新潟県佐渡郡湊町一四三番地(後の両津市、現在の佐渡市)に、酒造業・海運問屋を営む父慶太郎と母リクの長男として誕生した。

北家は、湊町では名家、資産家であり、父慶太郎は、後に湊町長や初代両津町長を務めた地元の有力者であっ

た。北家の宗旨は浄土真宗であり、家付き娘であった「曾祖母クヲ、祖母ロクともに親鸞の熱心な信奉者（評伝Ⅰ、一四頁）」であった。母リクは「日蓮ゆかりの塚原根本寺のまぢかにある本間家の出」であり、「日蓮に心酔し敬仰していた（評伝Ⅰ、一六頁）」とされる。

松本健一は、北が法華経に傾倒するようになった理由について、いささか感傷的に、以下のように述べている。

北一輝に対して、日蓮は誰によって語られたか。（…中略…）北一輝が法華経に埋没する秘密は、それが母によって語られたことよっている。広くいえば、母なるものによって語り伝えられているということである。日蓮が、住み、歩き、瞑想していたと追想される大地が母の口を借りて、北のふるさとを形成している。（評伝Ⅰ、一九頁）

しかしながら、母リクが日蓮に心酔し、北に日蓮について語ったという確証はなく、松本の推測にすぎないのではないだろうか。弟の北吟吉によれば、

母の生家には日朗上人か日蓮上人かが持つてゐたといひ伝へられる古ひ法華経が伝はり、之が兄の所有となり、陸軍刑務所内でも、日日この由緒あるお経を上げてゐたのも、奇縁であらう。（『風雲児・北一輝』 宮本編、二五七頁、初出『文芸春秋』（臨時増刊）昭和三〇年六月号）

この『法華経』経巻は、北の生涯をたどるうえで極めて重要な経巻である。北は、母の生家に伝わるというこの経巻を、一九一六年一月故郷より取寄せ、上海でも東京でも肌身離さず読経にふけり、獄内にも持込み、最後には

経典の裏面に息子大輝宛ての遺言を書いたという、まさにその経巻である。

しかしながら、経巻の出自については、相当の疑問を感じざるを得ない。この経巻の写真は、裏面の遺言とともに、田中惣五郎『北一輝』の口絵に掲載されているが（末尾写真参照）、はたしてこの読みがな付きの経典は本当に鎌倉時代から伝わったものであろうか。私には、江戸時代あたりに作成された大量生産の版本本のように見えるのである。

また、経典が母の生家に伝わったという吟吉の文章についても、それとまったく矛盾する彼の「談話」⁽⁵⁾が存在する。

北の珍藏した法華経は、由緒あるものであった。北の母の実家は佐渡の塚原根本寺所在地であり、この寺は日蓮ゆかりの寺院であった。ここに所蔵された法華経は、日蓮のものといひ、日朗のものとも伝えられるが、根本寺住職が酒ずきで酒屋の北家に借財がかさみ、その「かた」の意味もあつて、この法華経を北家へもちこんだのだそうである。真宗の篤信者たる北家では、法華経とは縁遠く「迷惑な預りもの」として、庫底に収めて一年一度の虫干しにだけ取出していたのであったが、没落のち叔父の本間が「新穂文庫」へ寄付してしまった。北はこの虫干し時代を回顧してこの法華経がほしくなり、「支那革命外史」一部と交換する条件で、この経文を手に入れたのである（北吟吉「談話」。（田中、一九三頁）

この「談話」の方が、具体的に詳細であり、いかにも真実とも思えるが、もしこれが真実であるなら、この『法華経』⁽⁶⁾は母の生家とは何の関係もなく、母が熱心な日蓮信者であったという証拠にはならないということになる。

2 小・中学校時代

当時の佐渡は、自由民権運動の嵐が未ださめやらぬ時代であり、北の父や多くの親戚、恩師、先輩たちも、運動の推進者、共鳴者となっていた。親戚には地方の政治に関わったものも多く、父慶太郎も、町長や自由党系の郡会議員をつとめるなど、政治には深く関わっていた。大日本帝国憲法が發布されたのは北が七歳の時、第一回帝国議会が開催されたのは八歳の時、日清戦争とそれに続く三国干渉は十二、三歳の頃であり、北の周囲の大人たちは政治談議にふけり、愛国心を競い合っていたであろう。

北は、尋常小学校、高等小学校とも成績優秀であったが、注目すべきは、この頃、民権家でもあった儒者若林玄益の塾で学び、「漢文については相当の実力をつけた（評伝Ⅰ、二九頁）」とされることである。この経験が、後に『法華経』の読誦と理解におおいに役立つたのではないかと考えられる。

北は一八九七年六月、新設された佐渡中学に入学した。当初の成績は優秀であった。中学時代、北は「時弊を論ずる」演説に興味を示したばかりでなく、与謝野鉄幹が主宰する『明星』に熱中し、蕪村、子規、紅葉、露伴などの文学書だけではなく、時事問題や社会主義を論ずる「平民叢書」を読んでいたという（評伝Ⅰ、四〇頁）。しかし、持病の眼病のため中学校は休みがちであり、成績もさがる一方でついには落第し、恐らく北家の経済的な原因もあって、一九〇〇年十一月、退学届を提出するに至っている。中学校に在籍したのは、三年五カ月であった。

3 上京と帰郷

中学校退学後もしばらく入院生活を続けていた北は、「明治三四年（一九〇一年）春、七カ月の入院生活から解放されて上京した」と推定される（評伝Ⅰ、六五頁）。この頃すでに、北は政治への関心を高めていたと考えられる。一九〇一年五月には、幸徳秋水（一八七一—一九一一）、安部磯雄（一八六五—一九四九）らによって日本最

初の社会主義政党「社会民主党」が結成され、北も大きな影響を受けたと考えられる。

北の最初の論文とされる「東京 硬石」名義の「人道の大義」が『佐渡新聞』に掲載されたのは、一九〇一年一月二一日から二九日にかけてのことである（著作集3、三一—一〇頁）。「この論文は、社会民主党宣言との類似面のほかに、そこから削除された事項が「国民の天皇」理念の附加とともに大きな意味を持っている。削除項目は、軍備の全廃と土地および資本の公有とである」（評伝Ⅰ、七五頁）、とされるように、後の『法案』の萌芽ともいべき考え方が述べられている点が興味深い。

その後、北は、一九〇五年末にかけて、上京と帰郷を何度か繰り返すが、その間、彼は『佐渡新聞』を中心に、多くの論文と詩歌を発表している。内容は、政治問題、日露戦争問題、短歌論、恋愛論等多岐にわたるが、その中で、重要と思われる論文、詩歌は以下のとおりである。（掲載はいずれも『佐渡新聞』）

- ① 卓堂「国民对皇室の歴史的觀察（所謂国体論の打破）」（一九〇三年六月二五—二六日）（著作集3、三六一—三八頁）（「卓堂」は『佐渡新聞』での筆名：筆者注）
- ② 卓堂「日本国の将来と日露開戦」（一九〇三年七月四—五日）（著作集3、七三一—七五頁）
- ③ 卓堂「日本国の将来と日露開戦（再び）」（一九〇三年九月一六—二二日）（著作集3、七六一—八四頁）
- ④ 卓堂「咄、非開戦を云ふ者」（一九〇三年一〇月二七日—一二月八日）（著作集3、八五一—九八頁）
- ⑤ 卓堂「社会主義の啓蒙運動」（一九〇五年一〇月一三—二二日）（著作集3、九九—一一〇頁）
- ⑥ 一社友「佐渡中学生諸君に与ふ」（一九〇五年十二月五日）（著作集3、一二一—一二六頁）

前記①は、連載二回で不敬事件を起こし、すぐに連載中止になったといういわくつきの論文であるが、その内容は、「いわゆる国体論の『万世一系』天皇制神話の虚構をあばき、帝王の実権を奪取した英雄者こそ、国家生命の

持続者であり、天命を受けた者であると暗示（評伝Ⅰ、一四七頁）するものであり、後の『国体論』の思想の骨格がすでに表れていることに注目したい。

前記②～④は、「社会主義者にして而して帝国主義者（著作集3、八七頁）」を自称する北が、「露国に対する開戦、然らずむば日本帝国の滅亡（著作集3、七三頁）」の気概で島民に檄をとばす激烈な日露戦争開戦論であり、特に④では、非開戦論を唱える内村鑑三を痛烈に批判している。

しかし、実際に戦争が始まると、「あれほど関心を寄せていた日露戦争の戦況にも、関心を寄せなくなっていた（評伝Ⅰ、二四一頁）」。また、戦争が終了し、世情が「屈辱的な」ポーツマス条約の締結をめぐって大騒ぎとなり、日比谷焼討事件（一九〇五年九月）で東京に戒厳令が発せられるような非常事態に陥っても、「彼は世間から隔離され、超然として（評伝Ⅰ、二四二頁）」、『国体論』の執筆に没頭していたのであった。

前記⑤は、翌年刊行されることになる『国体論』の第五編「社会主義の啓蒙運動」の草稿を一部掲載したものであり、すでにこの時期に『国体論』の原稿がほぼできあがっていたことを推測させる。

前記⑥は、一九〇五年秋、帰郷した際に、佐渡中学の「後輩たちによびかける革命の檄文であるとともに、みずからの浪漫的革命への旅立ちの狼火（評伝Ⅰ、四九頁）」とされる。

4 早稲田大学聴講生時代

北は、一九〇四年夏、二二歳のとき、同年四月から早稲田大学の予科に通っていた弟吟吉をたよって上京している。彼は吟吉と同居しながら、早稲田大学政治学科の聴講生（非正規ともいう）となり、当時上野にあった帝国図書館に通っていた。その目的は、『吾人の帝国』理念としての社会主義思想の練成と、その黄金郷実現の戦略理論の考究（評伝Ⅰ、二四一頁）、すなわち『国体論』執筆のためであった。

吟吉は、北の勉学の内容について以下のように述べている。

兄は早稲田では当時人気の頂上にあつた浮田和民博士や有賀博士の講義を好感を以て迎へてゐた（…中略…）、上野の図書館に通ひ出した。（…中略…）公法関係のものでは、有賀、穂積、井上、一木、美濃部博士の諸著、経済学関係のものは金井延、田島錦治、桑田熊蔵諸博士の当時の所謂新経済学傾向のもの、社会主義関係のものは安部磯雄氏始め社会党諸氏のもの、進化論では丘博士のもの、思想関係のものは井上（哲）博士や樋口勘次郎氏のもの、其他目星い翻訳書は数限りなく読み耽つた。（宮本編、一三九頁）

これを見る限り、北の東京での勉学対象は、政治学、法学、経済学、社会主義思想などが中心であり、あくまでも『国体論』執筆の準備のためであることがわかる。

一方宗教関係の著作に関しては、当時、西欧の近代仏教学は日本に導入される過程にあり、姉崎正治や村上专精などの日本における近代仏教学の創始者たちによる著作も刊行されていたし、⁽⁸⁾前述の哲学者、井上哲次郎も『釈迦種族論』（哲学書院、一八九七）、『釈迦牟尼伝』（文明堂、一九〇二）などの近代仏教学の知見に基づく著作を著しており、北がこれらの著作を読んでいた可能性は十分にあるであろう。

5 まとめ

北が日蓮の配流された佐渡に生まれたことから、我々の中には、北が幼いころから『法華経』や日蓮に親しんできたにちがいない、佐渡に生まれたことが『法華経』に傾倒するきっかけとなつたにちがいない、という先入観がある。⁽⁹⁾しかし、北の幼少時代を、その著書や言動から検証する限り、そのような確証はないと言わざるをえない。

母リクの生家の宗旨が日蓮宗であったとしても、北が幼少の頃、母から『法華経』や日蓮について大きな影響を受けたという証拠は発見できなかった。

北が後に、二・二六事件に関する憲兵隊調書で、以下のような供述をしていることにも注目したい。

私は佐渡に生まれまして、少年の当時、何回となく順徳帝の御陵や日野資朝の墓や熊若丸の事蹟などを見せられて参りまして、承久の時の悲劇が非常に深く少年の頭に刻み込まれました。

帝の痛ましさと云ふ様な事、乱臣賊子の憎むべき事と云ふ様な事は単純な頭に刻み込まれて来ました。其当時の佐渡でありますから、ほんの絶海の孤島で私は漁夫の子供等と一緒に育つて来まして、何等外界の刺激もなく、真実の自然児として生活して居りました。(昭和十一年四月一七日付、東京憲兵隊第七回聴取書)著作集3、四四三頁)

北が、幼少時代に日蓮の影響を受け、取調時も日蓮を信奉していたのならば、ここに日蓮の名前が挙がっていないのは、いささか奇異に思える。まして、北は「私は漁夫の子供等と一緒に育つて来まして」というのである。

また、北が佐渡時代に発表した多くの論文や習作には、『法華経』や日蓮の影響を受けたと思われる文言はまったく見出すことができなかった。上京時における勉学も、『国体論』執筆のための法学、政治学、経済学等社会科学が中心であり、当時勃興しつつあった近代仏教学が北の思想に多少なりとも影響を与えたという確証は得られなかった。

学生時代の北の関心事は、もっぱら世界の中の「日本」という国家の在り方や今後進むべき道にあり、宗教や仏

教については、大きな関心は持っていなかったのではないかと考えざるをえない。

三 『國體論及び純正社會主義』

本章では、北一輝が最初の著作『國體論』を自費出版した一九〇六年から、一九一五年二月の『外史』（前半部分）配布の直前までを、『國體論』を中心に考察する。

1 時代背景

日露戦争の終結から第一次世界大戦の勃発に至る約十年間は、日比谷焼討事件や大逆事件で世情が騒然とし、内政・外交に多くの問題を抱える中、長州閥の桂太郎（一八四八—一九一三）と政友会の西園寺公望（一八四九—一九四〇）が交互に政権を担当したいわゆる「桂園時代」であった。

日露戦争の結果、満洲に利権を獲得した日本は、一九〇六年に南満洲鉄道株式会社を設立して本格的な大陸経営に乗り出した。一九一〇年には韓国を併合、一九一四年七月の第一次世界大戦勃発に伴い連合国側について青島を爆撃、占領し、一九一五年一月には大隈内閣が悪名高い「対支二十一カ条の要求」をするなど帝国主義的な政策を急速に進めつつあった。陸海軍の軍備拡張が進められ、いわば「経済小国の軍事大国化」（坂野、一九八九、二八四頁）という状況に立ち至っていた。

政治思想的には、片山潜（一八五九—一九三三）や堺利彦（一八七一—一九三三）によって日本社会党が結成され（一九〇六）、社会主義が合法的に認められる一方、幸徳秋水は無政府主義に傾いていった。

また、日蓮を信奉し「日蓮主義」を提唱した田中智学は、既に一八八五年、東京で「立正安国会」を設立していたが、一九一二年には『国柱新聞』を創刊、一九一四年には「国柱会」を設立し、「國體論」と「日蓮主義」を結

びつけた活発な運動を全国に展開していた。

中国大陸では、二五〇年以上続いた清朝は崩壊しつつあり、欧米列強による国土分割が実現するかのような有様であった。そのような状況の中で、中国各地で「排満興漢」を旗印に革命の機運が高揚して武装蜂起が起り、辛亥革命が始まるのである。

この間、北一輝は、『国体論』執筆の後、日本に渡ってきた中国革命の闘士たちと交流を結び、一九一一年一月には中国大陸に渡って、この辛亥革命に積極的に関わっていくことになるのである。

2 『国体論』の思想

一九〇六年五月九日、二四歳の北は『国体論』を自費出版する。その『国体論』「緒言」で、北は本書執筆の目的について、以下のように述べている。

凡ての社会的諸科学、即ち経済学、倫理学、社会学、歴史学、法理学、政治学、及び生物学、哲学等の統一的知識の上に社会民主主義を樹立せんとしたることなり。（著作集1、一頁）

しかし、北のいう「社会民主主義」は、国家主義とも自由主義とも矛盾するものではない。

本書は首尾を一貫して国家の存在を否む今の社会党諸氏の盲動を排すると共に、彼等の如く個人主義の学者及び学説を的に銚を磨くが如き惑乱を為さざりき。即ち本書の力を用ひたる所は所謂講壇社会主義といひ国家社会主義と称せらる鴆的思想の駆逐なり。（著作集1、一）

この引用からは、北にとって「社会民主主義」とは、現代的な欧州的社会民主主義とは異なり、「民主革命」である明治維新によって目指され、大日本帝国憲法の制定と国会の開設によって既に完成していなければならないはずのものであり、「個人（国民）」と国家とが背反しない状態、いいかえれば、個人主義と国家主義とが全き共存を成しうる世界が、ついに北にとっての理想社会（評伝Ⅱ、五一頁）であったことが読み取れる。

『国体論』における最も有名な文章、北の天才と狂気を併せ感じさせる極めて印象的な文章に次の一節がある。

吾人々類は将来に進化し行くべき神と過去に進化し来れる獸類との中間に位する経過的生物なり。今日、吾人々類は人類の猿猴類と分れたる時代の祖先の化石を発掘して類人猿と名くる者を見出すならば、吾人々類が類人猿として消滅せる如く更に人類として消滅せる後に於ては、吾人々類より分れて進化せる人類の子孫なる神の化石学者によりて『類神人』として発掘せらるべき半神半獸の或者なり。（著作集1、101頁）

この文章によって明らかのように、北は、生物進化論を信奉し、そこから発展した社会進化論をも信奉していた。したがって、北は、社会進化論に基づく欧米の社会主義にとって、進化論を否定するキリスト教が最大の障害になると同様に、日本の社会主義にとっての最大の障害は、万世一系の天皇は神の子であると信じ、大日本帝国の主権は天皇にあるとする所謂「国体論」である、と考えていた。

欧米の国体論（キリスト教を指す…筆者注）がダーウィン及び其の後継者の生物進化論によりて長き努力の後に

智識分子より掃蕩せられたる如く、日本の基督教（『国体論』を指す：筆者注）も亦冷静なる科学的研究者の社会進化論によりて速やかに其の呼吸を絶たざるべからず。（著作集1、二頁）

二三歳の若き北が、一八九〇年の教育勅語發布から二十数年経過し、国体思想が定着を見せていた当時、このよ
うな「革命的」な考え方を持つていたことには驚嘆せざるを得ないが、北自身、自分の思想は「革命的」なものであると考えていたのである。そのことは次の文言にも示されている。

著者は潜かに信ず、若し本書にして史上一片の空名に終るなきを得るとせば、それは即ち古今凡べての歴史家の挙りて不動不易の定論とせる所を全然逆倒し、書中自ら天動説に対する地動説といへる如く歴史解釈の上に於ける一個の革命たることに在りと。（著作集1、二―三頁）

3 『国体論』にみる宗教観

『国体論』を読んでいくと、仏教、宗教に関連する言辞が様々な箇所に見れることに気がつく。

主要な箇所を以下に列挙する。（番号は筆者により、傍線は宗教に関する言及部分を示す）

- ① 新しき主張を建つるには当然の路として旧思想に対して排除的態度を執らざるべからず。破邪は顯正に先つ。故に本書は専ら打撃的折伏的口吻を以て今の所謂学者階級に対する征服を以て目的とす。（緒言）著作集1、四頁）
- ② ダーウィンが『種の起原』の一本に於て基督教の信仰と甚しく背馳するを慮りて人類の地位につきて説明することを避けたりし如く、今日の生物進化論者は基督教の『人類は神の子なり』と考へ来れる独断を打破するに急にして正確に人類の地位を定むるの暇なく……（著作集1、一〇〇頁）

③ ダーウィンの時代よりして生物進化論は人類を神によりて作られたる神の子なりと云ふ基督教の信仰を破らんとす。がために全く人類の動物なることを更に他の諸科学の上より立証し……(著作集1、一〇一頁)

④ 社会単位の生存競争と云ひ、相互扶助による優勝劣敗と云ふことは基督よりも積尊よりも遙かに遙かに高貴なる福音なることを。(著作集1、一〇八頁)

⑤ 社会主義が実現せられて、即ち今の下層階級が上層階級に進みて全人類が天地万有の上に君主となり貴族となるの時、(…中略…) 恋の理想は(…中略…) 全人類の大を看客として積尊とマリアとの恋なり。実に恋の理想は社会の理想なり。(…中略…) 理想として今日の男女に問へ、積尊基督のごとき真善美、マリア觀世音の如き真善美は必ず恋の理想たるべし。(著作集1、一七八頁)

⑥ 道德とは社会性が吾人に社会の分子として社会の生存進化の爲めに活動せんことを要求することなり。故に吾人が吾人自身を社会の分子として(小我を目的としてに非らず)より高くせんと努力することが充分に道德的行為たると共に、多くは他の分子若しくは将来の分子の爲めに、即ち大我の爲めに小なる我を没却して行動することをより多く道德的行為として要求せらる。彼の大我の生存進化を無視して小我の名誉栄達を要むる行為が不道德とせらるゝのみならず、小我の利益其事を目的としての(社会の分子としてに非らず)行為が假令偶々社会の利益に帰することありとも一般に道德的行為とされざるはこの故なり。(著作集1、一八四頁)

⑦ 大釈迦をして破羅門の哲学と衣食に不自由なき印度に産れしめずして終生を営々たる氷雪の下に哲学の芽もなきエスキモー部落に置けば実に小さき偶像教の開祖たるに過ぎず。基督が未だ世界的眼光なくして只学者とパリサイ人とを対手とせしは猶太以外に足跡の及ばざりしが爲めにして、ポロによりて始めて世界に氾濫せる思想となりしは基督の思想を抱いて世界に翼を張れる羅馬に入れるを以てなり。(著作集1、一九三頁)

- ⑧ 釈尊は結跏趺坐して宇宙循環説の外に出づる能はざりき、而しながら彼れよりも研究の積める今日の吾人は宇宙人生の進化しつゝ、あることを明かに解し得たり。(著作集1、一九四頁)
- ⑨ 社会と個人とは単に大我と小我との立脚地の相違なり。(著作集1、一九四頁)
- ⑩ 而しながら今日の理想として仰いで以て到達せんと努力しつゝ、ある所は、男子としては基督釈迦の如き女子としては觀世音マリアの如きものなるべし。(著作集1、一九六頁)
- ⑪ 茲に至つては恋愛は小にして生存競争の名や卑やし。小我は大我となり大我は無我となる。——生物進化論は大釈尊の哲学宗教に帰着せり。(著作集1、二〇二頁)
- ⑫ ヤスタラ姫を捨てたる釈尊の恋愛は全人類の男女を添寝に四千年間の理想たるべきものを遺伝したり。(著作集1、二〇三頁)
- ⑬ 吾人は母の腹中を出でて基督の腹中に入り釈尊の腹中に入れり。否！依然として社会の腹中に在り。而して基督も釈尊も全社会も吾人の腹中に在り。茲に至て何の一夫一婦論あらんや、恋愛神聖論あらんや。大我の愛なり、無我の愛なり、絶対の愛なり。『人類』は滅亡して『神類』の世は来る。(著作集1、二〇三頁)
- ⑭ 即ち、従来の哲学宗教の如く現在の小個体の死後を他世界に求め、理想は自己の胸裏に止まりて実現する能はずと云ふが如きは、多神教の哲学祖先教の宗教と等しく旧哲学旧宗教として棄却されるべき個人主義の哲学宗教と云ふべく。(…中略…) 故に社会民主々義の哲学宗教は基督教を排し仏教を付けて(ママ)只社会民主々義の哲学宗教として立つべし。(…中略…) 吾人は独乙皇帝に対したる如く釈尊の脱糞基督の放屁を語る者にあらず、而しながら斯る排泄作用を余儀なくされたる彼等は神仏の美に非らず。(…中略…) 社会民主々義の天国に昇るべき門はアーメンにあらず、極楽に到るべき途は南無阿弥陀仏にあらず、一に階級闘争にあり。個性發展にあり。

伏能啓発にあり。自由恋愛にあり。科学にあり。(…中略…)彼の絶対の愛を説くと云ふ基督教徒、無我の愛を説くと云ふ仏教徒、而して殊に近年に至りて自ら預言者と称し救世主と掲げて其等を宣伝しつゝある者に至つては吾人断じて与みせず。(著作集1、二〇四―二〇五頁)

⑮ 只、此の日本と名けられたる国土に於て社会主義が唱導せらるゝに当りては特別に解釈せざるべからざる奇怪の或者が残る。即ち所謂『国体論』と称せらるゝ所のものにして、(…中略…)是れあるがために基督教も仏教も各々墮落して偶像教となり以て交々他を国体に危険なりとして誹謗し排撃す。(著作集1、二〇九頁)

⑯ 而して是と同時に吾人及び独立の良心を有する者は博士の信仰(法学者穂積八束の国体論をさす…筆者注)より自由ならざるべからず。本地垂迹説を去れる真の仏教徒には博士の信仰は意義なき者にして、唯一神を信ずると云ふ基督教徒には博士の宗教は野蛮時代の多神教として映ずべし。(著作集1、二五一頁)

⑰ 聖武天皇の如き仏教の熱誠なる信奉者が出で、仏教の信仰を国家の臣民に要求すとも、大日本帝国の前に有する信仰自由の権利によりて穂積博士は其の尊貴なる神道の信仰を放棄するに及ばざるべきなり。又、今後の天皇が基督教を信仰するに至るとも、全国の厳肅なる戒律を守れる円頂等は今日基督教に向つて為しつゝある如く、仏教は逆賊なりとして攻撃さるべき理由なき者なり。(著作集1、二五二頁)

以上『国体論』における宗教に関連する多くの引用を見る限り、北が仏教、キリスト教、神道を問わず、特定の宗教を信仰していたとみられるような箇所は一切ないことが解る。北にとつて既存の宗教は信仰の対象ではなく、むしろ「社会民主主義」実現のためには排除すべき邪魔なものであったのである。

『国体論』では、国民は大日本帝国憲法によつて守られるべき「信仰自由の権利」を持ち、「国体論」の穂積博士

も神道の天皇も信仰の自由を有するのであるが(17)、北の提唱する社会統合の核としての「社会民主々義」実現のためには、キリスト教も仏教も、もちろん「国体論」も役にはたたないとするのである(14)。

北の『国体論』執筆の目的は、あくまでも、万世一系の天皇が大日本帝国の主権者であるという「国体論」を排し、北のいう「社会民主々義」を宣揚することにあった。そこでは、特定の宗教への信仰や傾倒はまったく認められない。それは仏教、キリスト教、神道等から偏りなく広く引用していることから言えよう。引用の仕方、良くいえば冷静で客観的ではあるが、野卑で下品なたとえもあり(14)、宗教に対する畏怖や尊敬の念はほとんど感じられない。前章で、「北がこれらの著作を読んでいた可能性は十分にあるであろう。」と述べたが、『国体論』の文章を検証する限り、早稲田大学の聴講生時代に、一般的な教養として、仏教やキリスト教などの宗教に関する一通りの最新知識を得ていたと考えるべきであろう。

4 中国同盟会と辛亥革命

北は『国体論』を各界の名士たちに送りつけた。その結果、作家でジャーナリストの矢野龍溪(一八五一—一九三二)、東京高商教授・法学博士の福田徳三(一八七四—一九三〇)、当時東京帝国大学を卒業したばかりの河上肇(一八七九—一九四六)、社会主義者の片山潜などによって、絶賛されたり好意的に評価されたりした。しかし、出版直後の五月一日には『国体論』は内務当局によって発禁処分となり、北は当局により、社会主義者として登録され、警察の監視下におかれる身分となった。

一九〇六年一月、北は宮崎滔天(一八七一—一九二二)らが主宰するシナ革命、ロシア革命を紹介、評論する雑誌『革命評論』の同人となり、引き続き、同誌の母体ともいえる「中国同盟会」に加盟した。

「中国同盟会」は、一九〇五年八月二〇日、興中会の孫文(一八六六—一九二五)らによって東京で結成され

た清朝打倒を目指す政治結社であり、日本側には宮崎の他、黒龍会の内田良平（一八七四—一九三七）などが、中国側には華興会の主力メンバーである黄興（一八七四—一九一六）、後に北の盟友となる宋教仁（一八八二—一九一三）、光復会の章炳麟（太炎）（一八六八—一九三六）などが含まれていた。

この頃、北が『革命評論』第六号（一九〇六年一月十日付発行）に「外柔」名で発表した「自殺と暗殺」と題する論説から引用する。

宗教は天照皇大神宮を祭り三種の神器を三位一体とすれば足れり、其の剣は日本武尊の熊襲を征伐せしときの者にして大日本魂（ダイニツポンコン）の宿る処、日露戦争に勝ちしも是れが為めなり。然るに仏教といひ基督教といひ進化論といひ猿の親類といふが如きに心を惑はされ、終に僭越にも自己の主権を以て批判せんとするが故に煩悶あるに非らずや。（著作集3、一三八頁）

ここでは、北は熱狂的な国体論者に扮して、逆説的に「国体論」を批判しているのであって、記載内容をそのまま受け取っては誤りであることに注意する必要がある^⑩。すなわち、北は、天照皇大神宮や三種の神器など一切信じていないのであり、むしろ、自著である『国体論』と同様に、北が仏教もキリスト教もまとめて批判していることに注目すべきだと考えられる。

一九一一年一〇月一〇日の武昌蜂起をきっかけに辛亥革命が起ると、北は盟友、宋教仁の要請に応じて、上海に渡航した。翌年一月一日には中華民国が成立し、孫文が臨時大總統に就任する。その後、一九一三年四月に上海領事館から退去命令を受けて帰国するまでの約一年半が、北の第一次上海時代である。

北は、この間、上海、南京、武漢（武昌・漢口・漢陽）の間を行き来しながら、武昌蜂起を指揮した中部同盟会（中国同盟会の分派）のメンバー、宋教仁、譚人鳳（一八六〇—一九二〇）らと連絡をとりつつ、中国革命の真っ只中を奔走した。しかし、一九一三年三月二〇日、宋教仁が大総統・袁世凱（一八五九—一九一六）の放った刺客により暗殺され、さらに四月八日、上海領事館から三年間の退去命令を受けて、同年五月、北は失意のうちに帰国することになるのである。

この時代、北の家族関係に大きな影響を及ぼすことになる二つの重要な事柄が起っているのです、これについて簡単に触れておきたい。

一つは、後に北の妻となり、靈媒として『靈告日記』の成立に大きく関わることになる間淵ヤス（北すず子）との上海のホテル松崎洋行での出会いと結婚である。

もう一つは、後に、孫の瀛生（えいせい英生）を養子（北大輝）として北に託すことになる革命の指導者、譚人鳳との出会である。

5 まとめ

既に述べたように、北は、一九〇六年に刊行した『国体論』において、仏教だけでなくキリスト教や神道も含めて宗教に関連する用語を多用して、万世一系の天皇が日本を統治するといういわゆる「国体論」を批判し、北のいう「社会民主主義」を宣言している。そこには『法華経』や日蓮に限らず、特定の宗教や経典、宗教者を信仰したり、それに傾倒したりする傾向はまったくみられない。

例えば、前記「⑥」、「⑨」、「⑪」の引用に典型的にみられる「小我—大我—無我」についてみてみよう。

本来、仏教用語としての「大我」は、仏や菩薩の偉大さ、その智慧の偉大さ、また声聞や縁覚とは異なる仏や菩

薩の涅槃・悟りの偉大さを用いのである。「無我」は、仏教の基本的思想である「諸法無我」に象徴されるように、「アートマン」を否定して、執着や、我執の否定、超越、さらに実体的な存在がないことを意味し、それによって涅槃が達成できると説くのである。

しかし、北は、小我⇨個人の欲求、大我⇨社会（北にとっては実は国家）の要求、無我⇨神（北のいう「神類」の国、というように、仏教用語を使いながらも、その本来の意味とはかけ離れた北独自の耳触りのよい用法で読者を惑乱させるのである。¹¹

北は、このようなレトリック、すなわち難解な学術用語、特に宗教用語や仏教用語を駆使して、他の誰にも書けないような独創的な文章を編み出し、自分自身をも高揚させて、最後には読者を幻惑させ、納得（折伏？）させてしまうのであるが、この魔術的な手法は、『国体論』以後もさらに進化して継続していくのである。

（以下次号）

注

- (1) 冒頭で採りあげた五冊の歴史事典、人物事典の中で、『法華経』の影響について触れているのは、『岩波 日本史事典』が「大アジア主義、社会主義、法華経信仰などにより独自の思想を形成」と解説するのみであり、他の四冊はまったく触れていない。
- (2) 松本健一作成の「北一輝年譜」によれば、一九〇六年十二月、中国同盟会に入党し、神田錦館で演説したのが、東京での唯一の演説とされている。（評伝Ⅴ、二八三頁）
- (3) 松岡幹夫は、戦後の北研究の流れについて、「戦後まもない昭和二三（一九四七）年、丸山眞男は、北一輝を「日本ファシズムの教祖」と命名した。その後、昭和三四（一九五九）年に久野収が北の処女作『国体論及び純正社会主義』を再検討する中で「社会主義を土着化させ、国家主義を社会主義化させる」という同書の独創性を指摘し、以来、北に関しては、ファシスト、社会主義者、急進的ナショナリストなど多彩な評価がなされてきたと言ってよい。」と述べている。（松岡、五六頁）
- (4) 北一輝の実弟である北吟吉は、以下のように述べている。

兄の処刑が近づいたので、電報で郷里の母と菩提寺の住職を呼び寄せた。住職を呼んだのは兄の戒名を付けてもらうためであった。兄は数年前から法華経を信仰し（筆者注…これは聆吉の誤解または誤記と思われる）、菩提寺は東本願寺派なのでこの寺の住持に戒名を付けて貰い葬られることは頑固に拒否していたのだが、火葬場規則でそれは出来なかった。（宮本編、二七三頁、初出「謀られた北一輝」『人物往来』昭和三十年二月号）

(5) 田中惣五郎が『北一輝』で引用する北聆吉の「談話」は出典が必ずしも定かではない。同書「はしがき」の「参考資料」に、「I 新しく附加されたもの」「1 珍しいもの」のひとつとしてあげられている「四 人々の「談話」にあたる分類になるのであるか。聆吉が亡くなったのは一九六一年であり、同郷の近現代歴史学者である田中が聆吉から直接聞いた可能性も否定できない。

(6) 北聆吉の衆議院議員時代の秘書を務めた稲邊小二郎は、「日蓮宗大本山の塚原根本寺は山林を多く持つっており、歴代の住職のうちの一人が、至宝の経文まで手放さなければならぬ経済的理由は全く考えられない。（…中略…）当山に座る住職は、それなりの修行を積んだ住職であり、飲んだくれの僧侶が大本山に納まるとは到底考えられない。」（稲邊、六五頁）と述べているが、寺院の経済状態と住職個人の経済状態は別であり、個人的意見に過ぎないと思われる。

(7) 「佐渡中学生諸君に与ふ」には、次のような一節がある。

「あ、可憐羚羊の民は 涕泣徒らに他界の浄土にすがる。」（著作集3、一二二頁）
しかし、この一節は、佐渡中学の後輩に、社会の現状を見よ、この世は地獄である、上層階級はほいままな暮らしをしているが、「一般庶民は泣いて、ただ浄土にすがるしかない」という主旨を述べているのであって、特に北が浄土思想を主張しているわけではない、と考えられる。

(8) 当時、すでに以下のような近代仏教に基づく本が、続々と刊行されていた。（国立国会図書館デジタルコレクションのデータに基づく。）

姉崎正治『印度宗教史』（金港堂書籍、一八九七）、『仏教聖典史論』（経世書院、一八九九）、『上世印度宗教史』（博文館、一九〇〇）

南條文雄『梵学講義』（哲学館、一八九八）

高橋順次郎『巴利語仏教文学講本』（金港堂、一九〇〇）

村上專精『仏教統一論（全三編）』（金港堂、一九〇一—一九〇五）、『大乘仏説論批判』（光融館、一九〇三）

(9) この点については、近年に至っても、先にあげた松本健一を始めとして、未だに多くの研究者が誤解をしていると思われる

るので、いくつかの実例を以下に引用する。

〔北は〕日蓮の流罪地である佐渡の酒造りの家に生まれた。家は真宗であったが、母の実家は日蓮宗であった。こういうことが一輝をしてのちに日蓮信奉者たらしめる素地となったと考えられる。〔田村、一五五―一五六頁〕

〔大正五年の法華經受容は、幼時から日蓮に親しんで来たおいたち、心靈現象を信じやすい体質、などを無視できぬとしても（以下略）〕（渡辺、二八七頁）

〔日蓮流謫の地佐渡にあって、北が早くから日蓮や法華經に馴染んできたことはすでに触れたが、本格的に法華經にのめり込んでゆくのは大正五（一九一六）年一月以降である。（…中略…）佐渡の幼き日以来親しんできた法華經への漠とした信仰に何らかの回心が起こったものとみてよからう。〕（清水、二二二頁）

〔10〕松本健一は、「北は、わが日本民族は『万世一系の天皇』を戴く『万国無比の国体』のもとに生息しているのだから、何で煩悶する必要があるのか、この国体のもとに『忠君愛国の道徳』を抱いていれば、煩悶など生ずるはずがないではないか」と反論するのである。こういう言いかたに、これまでみんなたぶらかされてきたわけで、ここから〈外柔〉はまったくの国体論者、万世一系神話の信奉者だ、と判定するのである。〕（評伝Ⅱ、一八六頁）と主張している。

〔11〕松本は、「北にとつては個人が生命体であるとともに、国家もまた生命体なのであった。それを北は個人Ⅱ小我、国家Ⅱ大我と呼ぶのである。（…中略…）ついに世界を一国とする『ユトピア的世界統一』が実現される。これを北は神の国『無我』と想い描いている。（…中略…）北にとつて、このような『小我』から『大我』、そして『無我』への道すがすが、個人を生かし、国家を生かす途にほかならなかった。（…中略…）だがしかし、この小我―大我―無我への道すがこそ、個人主義―国家主義―超国家主義の必然性を示しているものにほかならないのであった。」と述べている。（松本一九九六、六六―六七頁）

参考文献

1 北一輝の著作

『北一輝著作集 第一巻』みすず書房、一九五九。

『北一輝著作集 第二巻』みすず書房、一九五九。

『北一輝著作集 第三巻』みすず書房、一九七二。（以上3冊は〔著作集1～3〕と表記する。）

『日本改造法案大綱』中央公論新社（中公文庫）、二〇一四。

松本健一（編）『北一輝 靈告日記』第三文明社、一九八七。（靈告）と表記する。）

2 北一輝に関する研究

- 稲邊小二郎『一輝と吟吉 北兄弟の相剋』新潟日報事業社、二〇〇二。
 清水元『北一輝 もう一つの「明治国家」を求めて』日本経済新聞社、二〇二二。
 田中惣五郎『北一輝 日本のファシストの象徴』未來社、一九五九。
 高橋康雄『北一輝と法華経』第三文明社〈レグルス文庫〉、一九七六。
 萩原稔『北一輝の「革命」と「アジア」』ミネルヴァ書房、二〇一一。
 藤巻一保『魔王と呼ばれた男 北一輝』柏書房、二〇〇五。
 前川亨『支那革命外史』からみた中国革命と日本ファシズム』『東洋文化研究所紀要第一三二冊』東京大学東洋文化研究所、一九九六。

松本健一『北一輝論』講談社〈講談社学術文庫〉、一九九六。

松本健一『評伝 北一輝 I 若き北一輝』岩波書店、二〇〇四。

松本健一『評伝 北一輝 II 明治国体論に抗して』岩波書店、二〇〇四。

松本健一『評伝 北一輝 III 中国ナショナリズムのただなかへ』岩波書店、二〇〇四。

松本健一『評伝 北一輝 IV 二・二六事件へ』岩波書店、二〇〇四。

松本健一『評伝 北一輝 V 北一輝伝説』岩波書店、二〇〇四。(以上『評伝 北一輝』五冊は、(評伝I～V)と表記する。)

宮本盛太郎(編)『北一輝の人間像』有斐閣〈有斐閣選書〉、一九七六。
 渡辺京二『北一輝』筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、二〇〇七。

3 法華経及び仏教学関係の著作

大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法蔵館、二〇〇一。

大谷栄一『近代仏教という視座』ぺりかん社、二〇二二。

菅野博史『法華経入門』岩波書店〈岩波新書〉、二〇〇一。

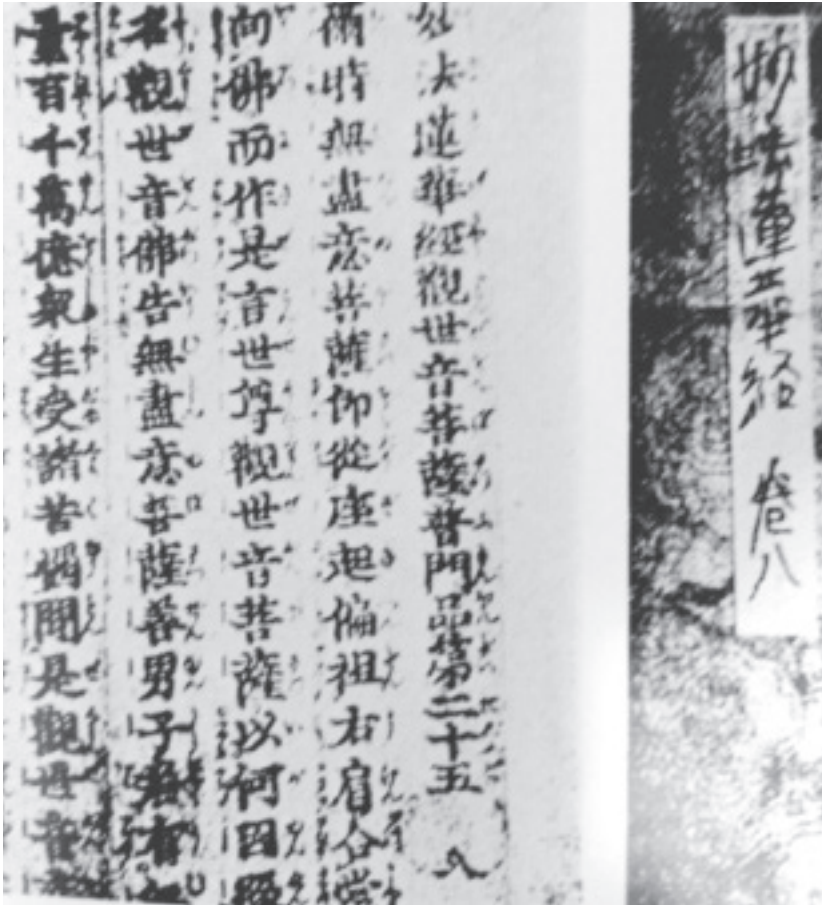
北川前肇(編)『原文対訳 立正安国論』大東出版社、一九九九。

小松邦彰(編)『ビギナーズ日本の思想 日蓮「立正安国論」「開目抄」』角川学芸出版〈角川ソフィア文庫〉、二〇一〇。

坂本幸男、岩本裕(訳注)『法華経(上・中・下)』岩波書店〈ワイド版岩波文庫〉、一九九一。

(以上『法華経』3冊は、(法華経・上、中、下)と表記する。)

末木文美士『日本宗教史』岩波書店〈岩波新書〉、二〇〇六。



『法華經』 經卷の写真

出典：田中惣五郎『北一輝 日本的ファシストの象徴』
(未来社、一九五九) 口絵写真より

田村芳朗 『法華経』 中央公論社（中公新書）、一九六九。

中濃教篤 『日蓮主義』の左派と右派』 『現代思想』 特集Ⅱ日蓮』 青土社、一九八二年四月。

西山茂（編） 『シリーズ日蓮』 4 近現代の法華運動と在家教団』 春秋社、二〇一四。

松岡幹夫 『日蓮仏教の社会思想史的展開』 東京大学出版会、二〇〇五。

4 その他

江口圭一 『体系日本の歴史』 14 二つの大戦』 小学館、一九八九。

坂野潤治 『体系日本の歴史』 13 近代日本の出発』 小学館、一九八九。

坂野潤治 『明治デモクラシー』 岩波書店（岩波新書）、二〇〇五。

山口 定 『ファシズム』 岩波書店（岩波現代文庫）、二〇〇六。